

ティの一体化を創出し、それが大会時のボランティア活動の基盤となり、大会後の都市観光誘因の原動力にもなっている。したがって、「まちづくり」の取組は官民協働の取組として重要になる。「文化・教育」の分野では、ボランティア活動への取組が中心となっている。大会開催においてボランティア活動の重要性はロンドン2012大会やリオデジャネイロ2016大会においても実証されている。住民の個人的能力や自発性でボランティア活動が成功したりリオデジャネイロと異なり、東京はボランティア活動の実績が少ない。そのため、ロンドンのようにボランティア活動を事前に準備し養成する必要がある。その意味で、ボランティア活動が教育面でのレガシーとして根づく可能性は高い。

最後に、「経済・観光」の分野に関しては、レガシー創出の取組として最も期待が寄せられている分野であり、地域の魅力や文化をアピールする取組がさまざまに企画されている。多分、地域の観光資源を基盤にして、「スポーツ・健康」、「障がい者」、「まちづくり」、「文化・教育」の取組が展開し、それらの総合的な取組の現れとして「経済・観光」があるといえる。つまり、地域の魅力や特徴は「スポーツ・健康」、「障がい者」、「まちづくり」、「文化・教育」の取組を反映したものであり、それらの取組の結果がインバウンドや交流人口の増加につながる。その際考慮すべきことは、トップダウンの取組だけでは、地域の魅力や性格は発信されないし、レガシーとして将来的に展開しない。地域の魅力を発見したり、発信したりする力としてのボトムアップの力が、すなわち地域住民からの企画や行動が必要になる。

#### 4. 多摩・島しょ地域における東京2020大会に関わる特性

本報告書では、「スポーツ・健康」、「障がい者」、「まちづくり」、「文化・教育」、「経済・観光」の取組を進めていくために、多摩・島しょ地域の特性も把握している。5つの分野に関する取組を支える多摩・島しょ地域の特性は、自然環境と都心への近接性、及び都市住民によって醸成されている。自然環境は豊かな緑や食の安全安心を支える農資源、及びオープンスペースの広さなどで特徴づけられ、それらの特性

を生かしたレガシーの創出が多摩・島しょ地域ならではの取組となる。「スポーツ・健康」分野においても、森林浴やフィトンチッド<sup>[1]</sup>を取り入れるなど自然環境を生かした散策道や自転車道の整備はスポーツと健康を融合させたレガシーとして地域のセールスポイントになる。さらに、「まちづくり」の分野でも、豊かな緑や農資源は良好な居住環境をつくるだけでなく、「住んでよし、来てよし」のまちづくりや、安全安心で癒される居住空間の構築につながっていく。

都心への近接性は、とりわけ多摩地域の特性として重要であり、「経済・観光」の分野と関連して、インバウンドや交流人口を多摩・島しょ地域に呼び込む営力となる。実際、交通インフラの整備が進むことで、都心まで近接性は向上し、多摩地域は良好な住宅地として発展した。しかし、単なる住宅地の発展はアーバンスプロール<sup>[2]</sup>や混住化などによって、都市環境の劣悪化にもつながった。都心への高い近接性をポジティブに活用するのであれば、インバウンドや交流人口を増大させ、「経済・観光」分野のレガシー創出に貢献することが可能である。しかし、近接性をポジティブに活用する方策を進めるためには、「まちづくり」分野や「教育・文化」分野のレガシー創出、及び「障がい者」分野のユニバーサルデザインの整備などと連携しなければならない。つまり、いつでもどこでも誰でも楽しめ癒やされる「まちづくり」が行われ、そのような生活スタイルを文化として世界に発信することが、地域の特性を生かしたレガシーの創出になる。このようなインバウンドや交流人口の増加は近接性とともにも地域の魅力にも左右されるため、地域の魅力発見はボトムアップの力によって持続的に行われなければならない。

もう1つの地域特性として、多摩・島しょ地域の都市住民の属性や意識が挙げられる。本報告書でも地域住民へのアンケートを行い、レガシー創出の担い手としての都市住民を分析している。総じていえば、地域住民が東京2020大会とそのレガシー創出に高い関心をもつことは、地域の特性として十分に活用可能な資源であることを示している。しかも、ここでの地域住民は教育レベルが高く、常識的な人びとである。つまり、地域住民がロンドン2012大会のよ

うに、有用なボランティアとして教育され、「障がい者」分野のユニバーサルデザインにも協力的であることは間違いない。実際、多摩・島しょ地域の人材は東京2020大会運営のためのさまざまなボランティアとして重要になるであろうし、それ以上に大会期間中の、あるいは大会後のさらなるおもてなしの担い手として重要になるだろう。そして、このような人材の養成や経験が「教育・文化」分野などのレガシーとして世界に発信できるものになる。

#### 5. 多摩・島しょ地域における東京2020大会のレガシー創出に向けた取組への提言 —むすびにかえて—

本報告書では、多摩・島しょ地域らしいレガシー創出に向けた取組の理念として以下の3つを挙げている。

- 1) 実施しやすく継続可能な取組を推進する。
- 2) 地域を見直し、気づきを得る好機とする。
- 3) 近隣市町村等との広域連携を積極的に推進する。

これらの理念に基づいて、「スポーツ・健康」、「障がい者」、「まちづくり」、「教育・文化」、「経済・観光」の5つの分野のレガシー創出が図られ、本報告書でも具体的な取組が提案されている。しかし、重要なことは3つの理念をどのようにして有効に活用し、いかにして有意なレガシー創出を行うかである。

実施可能で持続的な取組のためには、地域住民の力をどのように活用するのか、あるいは地域住民のボトムアップの力と自治体のトップダウンの力をどのように組み合わせるかが重要である。創出されたレガシーの中心的な担い手は有形レガシーにしても無形レガシーにしても地域住民である。また、地域住民を巻き込むことにより、レガシーに関連した施設が持続的に管理されるだけでなく、都市環境やコミュニティも持続性をもつようになる。このような社会的持続性は成熟化する多摩・島しょ地域の新たな特性として世界に発信されていく。

地域資源を見直したり、発見したりする視点もレガシー創出の取組には不可欠であることは、本報告書の取組の提言からも明らかである。しかし、それは「言うは易く、行うは難し」の側面をもっている。つ

まり、地域資源の見直しや発見を誰が行うのかは不明確である。少なくとも、自治体の力(トップダウン力)と地域住民の力(ボトムアップ力)の協働が必要になる。さらに、発見や見直された地域資源の価値や有効な活用方法を見極める専門家や企業の力も必要になる。加えて、ローカルな資源をグローバルな視点から捉え直し、逆にグローバルな視点でローカルな資源を捉え直すことも必要になる。そのようなプロセスは地域で創出されたレガシーとして世界発信できる方策になる。

もう1つの理念である広域連携は、多摩・島しょ地域におけるレガシー創出の取組で最も必要である。実際、多くの自治体のレガシー創出はそれぞれの自治体の事業として行われようとしている。それぞれの自治体において創出できるレガシーやその取組には限界があり、5つのすべての分野においてレガシー創出の取組を行うことは難しい。そのため、いくつかの自治体を組み合わせることで、多様でユニークなレガシー創出が可能となり、それらの創出の取組への負担も軽減される。しかも、それぞれの自治体は地域の特性に適応した最適のレガシー創出の取組を行えばよいことになる。このように得意分野におけるレガシー創出に特化すれば、その取組も持続する。

いずれにしても、多摩・島しょ地域における東京2020大会に関するレガシー創出の取組はこれからであり、本報告書を参考にしながら効果的な取組が検討されることを期待したい。その一方で、多摩・島しょ地域のもつ特性やポテンシャルを最大限に引き出すレガシー創出の取組を官民産学が一体となって考えていかなければならない。

[1] 微生物の活動を抑制する作用をもつ、樹木などが発散する化学物質。癒しや安らぎを与える効果がある。

[2] 都市の郊外に無秩序・無計画に宅地が伸び広がっていくこと。